

中村俊定文庫  
文庫 18  
462



明和七(序)菊園坊祖英追善三回忌素山撰

俳諧菊園農路

全

小序

祖英法師亡てよ書撰集其志可り斯く故ありき  
三とせ我まの時より藤阿西人東江行脚の杖を  
留り此撰を始そて因りて乃茲句を集りて頗  
病臥にし毎夜暑厳きより是を能く終後初と  
と終以れりてや梓ふらりては舞とせり以  
亦使用といふ及た事ありてむあはれ二とやと  
道に所謂達し心とありて形を後とすゆえ

たゞと自歎息を漸今年皆三月中旬  
より小冊をなす事東西へ行く事と  
那々事あり

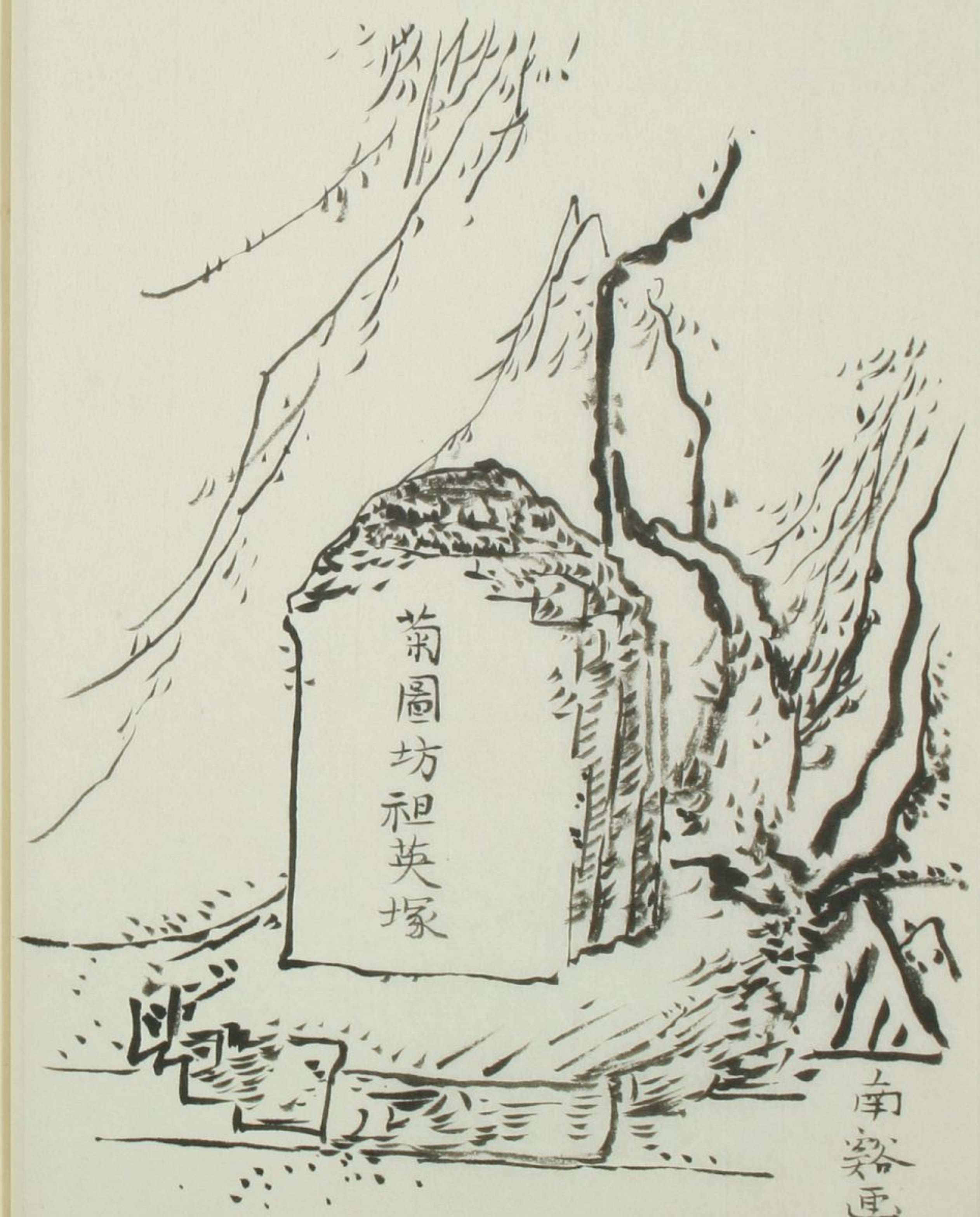
五年米乃捨や

由し

乃米乃捨や

志山





南谿画

序

全身脱去——多雲中——鈴取  
 ふ死——火裏——座——事——侶を  
 喝えふと凡そを那終る知識を  
 有——とぞん僧菊園深谷乃驛了  
 杖を留頭を死——何り——ある日  
 煮山小對——我山中をのそまら市中を

好む世に去る時事なり爰におぬそ  
云事ふしとそ既尔去人とそ  
山志きりに辞世を乞ふ僧笑ふ  
三

死事以知死り也とそ僧

山を此僧の事を知りたのこなり

空れ死に留む世ぬ名流ハ山

名流ハ書ぬ師と才子能中 僧

や狂志とそふと極月終末の事

な祭とそ何と那と睦月とそ

初の六日終且雨に入し水に失し終

何方とそなう骸をかきゆ

今終世にもかくなる人何事終盡山

語小はう務行脚蝶阿と同國のちふ

つきの追善の小冊をほくすも焦識

なつ穂いと此序を如そあふう返り抄  
札上に香紙紙に唐麻毫を少くふ

何ゆへに身そ

隠せしやう毒姑春

明和とく

半化坊



一七日を各香花を携碑前小  
白々奇仙真行

伊乃杉不流くと月あう利

素山

札の上り 白帛 志花

蝶阿

あ干張右刀をく雛子うら若く

露重

まより酒吞たまこさうき

羅門

およほくと尾子細き州乃莖

阿

牛姑子洗ふ所乃溜池

山



少  
管指髮赤う被くくくく

か〜板菓子結境〜そと賣

飛神や杉の葉ゆきを竹柱

そこ心あ〜り釜あけいぬいぬ

き〜ゆくに師乞のそそけ雪の山

餃そかめ〜と打明〜垂

麻子そ〜も〜れゆ〜し瘦骨が

太穀〜ゆ〜き〜破れ〜味線

門

重

木人

阿

文化

門

重

人

曆月の窓も照さぬ障もせき

炭〜芋煮 招樂結唐

散〜了櫻紅葉乃ゆ 汲ゆ

馬〜ゆ〜〜〜〜麻の横よ

あ〜〜〜〜〜〜〜油烟捨

乞合下知〜〜〜〜〜

青鷺乃羽會就おりあ 敷五

何や〜石と拜 日始〜秋

爰之

山

門

化

山

重

阿

人



小短き力もさけり旅の終り

あんとなせし長門<sup>長</sup>下宿

ちろくせ戸な記行燈の片隅

忍ぶをいんせと坊主のりり

俯向く袂に響く戀あはれ

折しゝ糸と針の半分

宵に月岩木の燃ゆるほし

難を半ば指しよみ小屋

化山之人門重阿化

裂衣織の青紙若物を秋あはれ

きよもまゆる須之の蟬折

ふとくと存茶をきりて都人

侘しを筆し貝売の碇

假初乃花のう記をと放下志

梅如形う似るもこれ

山 人 門 之 重 阿

加州大聖寺

梅咲けと僧の世無り新も所し 路長  
 清る水も衣も 春 甘谷  
 木ゆゑの佛はあへし喜の雨 如水  
 雪の色知るも志はぬも惜もきり 如<sup>女</sup>松  
 死後きり柳はうんてを 虎林  
 蛙よりきり泣くは衣の那 六浦  
 雪の雪くくる人志類 雨夕

梅えんり死ある人乃命の如 友巴  
 なる人を志後きり呼勝の家 紫瓶

才祖英ハ家をとり佛の意入餘カ  
 ある時ハ仇討を多めして年あり  
 介と一五十四才ハ一武死跡の州  
 毛の陰あを隠せり表は袖は  
 志あり熱烟肝を直しし種しころ  
 体しきりきねし先牌前に香花を  
 て拙き一章を述ぶ

石を好くかゝら失りり  
 む久乃五路

杉司

菊法師乃教句あま  
竹水と略し毎他を除き  
多し四季八句を阿ふ

東都に遊りて

菊園

明日を海に誰か見る事  
龍子此声

ゆるりゆるり  
僧云と

月もさす欠つる

菊乃香や日や強き

見巴しそ

先くと松の影

さ後と

終

元禄四年九月三日

歌仙

うぶハシの稲の穂並み朝日哉

路通

雁もくふ水身溜池の夕

昌庚

白碓乃くらくらと架礎おそめそ

翁

蠅燭の火はほろろ夕月

正秀

頼孫く银杏の廣葉から落葉

野徑

まわりて乳を志あふ急如流

乙州

関ちりもやなまゝら歌殺奇

書好

文ハ背賣となりて悟り

珍碩

何さぬつ芽毒と秋と一室くは

盤子

金堀りり歌洞乃御火

足東

田の力はいく川を鶴の打ならん

探志

芝居の札乃米あつめきり

游力

山嶽よりかゝれも不自由様のき

秀

夜寒より志あふ帯の徳云

通

月夜の二階子 猿をほきあけて

蕎麦の白みのむせふ 下積

かき流しや海の子花の燈かな

東風吹志ほる 菊水孤篋

むよる花轉りなう 狂あらん

豆腐上よに何事か 客まひ

怨何ふ義理を悟く 涙くむ

曇れと捨く 暁のすく見

くはやくに書てもぬふ 筆跡

汐のさく 月月の廻廊

暮の露山石屋の坊に 杓のそき

こふ 木のうき 蟬啼かき 虫

ろと矢しまさく けみ 漆まらき

白髪さく 髪を 髪屋の何とせめ

ちりく きれ 奇麗なり 膳を 組立て

夜のおふのむく 竹の子 孫

翁 秀 子 碩 州 翁 好 翁 好 翁 好

好 東 力 子 秀 碩 州 通

文いま川三史文選くわーかー

坐録押やる昼熟くくく寝

にさくくろ尻を終ふそりさや

升後みさあむ居風呂の漏

肉裏く川取とハ在家を花の宿

燕の出入め取やうふ 聲耳

此一卷ハ路通の真字よりて越中魚津  
侍者とある者の家珍なりしを予行脚能順  
写し来りて今夏に刊す

通

力

庚

子

碩

徑

四季混雑

武州搭尺

入相もちうくはく勢力やむめ能善

汲事とけく流あやかきんさ

花咲ぬ木をくくく雪解か

月も日も志くまに遊田にーか

毛くもぬる毛ぬふく花よ朧月

三十日より降ハ續けも初志くれ

動く日所笑日もつげ夏柙

白桂

好古

北川

麻中

浮山

菜把

魚光

影坊の坊をふりたる長寒の  
利雨

張弓の氣を何となくか  
秋露

木かきや曉白き西ひり  
蕉雨

梅り香り八重し一重なり  
菊茂

別れかとしり小障子や雑子の声  
路月

去る雨の中よりきき川や古の息  
一馬

流れる海流をかときあつ月  
み川

生佛り声誰誰そまねよ冬心  
松今

櫻そと分るも林火ぬ後繁るふ  
山戸

さかすかと石洗もや夕涼  
遊

永日に喰飽もせまういこ  
示来

かゝ堀の名は斗とさくら才雨  
虹山

外屋敷や砂粒をたまたまの葉の  
眉年

唐ききや嵐のそに横し  
松谷

夏川や砂子物とく小傾城  
秋湖

膨れや食も浮きを揚るれ  
快馬

久保島

女

金久保

上仁手

長沼

真下

勅使河原

女

本庄駅

女

木か〜〜や〜川〜引〜也〜夜〜忌〜結〜内

東方

阿竹

清〜る〜ま〜く〜借〜ぬ〜古〜縁〜を〜喜〜ぶ〜雪

尾明

日〜里〜に〜並〜ふ〜と〜あ〜ら〜ふ〜夕〜雲〜在

麓新田

曉山

重〜く〜も〜い〜と〜尾〜石〜落〜の〜光〜臥

三本

赤巾

木〜ゆ〜ろ〜ろ〜小〜袂〜を〜志〜す〜改〜干〜派

熊谷

紀菊

さ〜ら〜ら〜改〜善〜め〜や〜猫〜の〜戀

雪叩

秋〜結〜日〜の〜入〜〜と〜い〜れ〜と〜印〜り〜音

笑午

三〜芳〜野〜を〜何〜と〜ふ〜れ〜と〜知〜〜き〜ん

獨何

斧〜捨〜て〜木〜陰〜手〜杧〜乃〜涼〜う〜那

忍

柴立

あ〜ろ〜ろ〜や〜笈〜通〜〜と〜海〜手〜浮

成田

民哥

落〜葉〜引〜き〜ふ〜も〜筆〜紙〜と〜れ〜は〜し

吹上

蘭門

蟄〜の〜と〜路〜や〜書〜よ〜い〜情〜手〜蠅〜子〜紙〜と

東阿

蝶〜く〜や〜提〜〜と〜急〜〜と〜寄

前砂

橋志

色〜重〜ぬ〜杧〜〜と〜寄〜手〜木〜槿〜派

秩父

春挂

菜〜花〜も〜や〜頃〜見〜ゆ〜る〜垣〜初〜と〜

高島傳

文章

雪〜紙〜り〜や〜急〜と〜せ〜そ〜衣〜紙〜衣〜賣

白多



茶木能いし長閑大和河内系

東都

蓼多太

維子啼や己り信也に何事とせり

亡

鳥醉

古秤や細糸所り春志色

太無

影さか馬能果とふ夜寒八

女

野菊

車井の屈かふふまりや秋如暮

舞関

我影を水に足る日やかんふり

卷阿

仄山子 笑ちあひや 棗椿ふり

案字

和風の吹ふむまりや天能川

門瑟

紙燭しそ志く水の交張見る夜式

珪山

上州高崎

芳野こそおとふもよるは梅能色

亡

麥秋

そ能急や人あも何とあふ冬木立

一紅

木の間に顔は燈も青し春能雨

介江

望まると吹れあひや鐘とる

意山

猫能戀ある夜の石をくくれり

雨什

藤岡

春の野や妻あふれくくれり

迂生

十五

海面やまをくも波の切る後月  
むく書より紙くりにほく冬は  
送りたやまきゆる水に魚の音  
長閑さやなうれぬ水に魚の音  
秋風や那道は人お影るほ  
氣多合ぬ人さく人さく冬は  
と記さふ素は指や雑子お声  
鯉く移るあゝ動り架かき山

春室

西牧

舟山

大笹

有来

伊香保

文石

找谷

倉賀野

五凉

知二

前橋

煮輪

冬くれや唯月ひく我記と架

吉井

卜全

諸多おきくも能き居けゆらふ

其蝶

信州上田

掛り橋の左右へ別るあゝ秋は

麦秀

秋は雨がをきるあゝなうれきり

雨石

藤棚よ鄭賣眠る昼間うふ

左十

塩尻

眠郎

冬は霧外へあゝり秋は霧なり

湖北

新元ハ「事」人ナリ 錦々記 芋路

小夜更々川名也 凍すみふふ 梅詞

鶏々狐追々 霜々心 朝 善光寺 米居

秋秋神中人の後々 暮々うらむ 諏訪 沼揚

男々氣と人々 了々 余にえ々々 自得

岡野遠々 馬 狐 鼻 さら 厚 氷 越後高田 畝波

冬々 狐 多 仙 々々 々々 々々 泰尾

昔々 山 々々 山 々々 桐 々々 浦元 魚田

弱々 々々 の 我 々々 々々 々々 毎 々々 角 荒井 鷺太

振 々々 柁 々々 去 々々 年 々々 馬 々々 々々 五知 圖南

以 秋 々々 碓 々々 々々 々々 啼 々々 々々 越中富山 七 麻父

氣 短 々々 声 々々 々々 々々 々々 秋 々々 々々 鳥角

維 子 々々 々々 々々 々々 々々 々々 々々 々々 滑川 加真

き 々々 々々 々々 喧 々々 々々 々々 古 室 電 文史

暖や桃新あらしみのやうな著

境

蕪木

紫陽花のちや阿ぶま蝶新夏

生池

百合

水仙やきあも望みのりある物

丰間

あんくと鳥新居や冬木立

訖雀

曆なき深山も梅乃さうり哉

魚津

大器

かき路あや阿尾あしに山影法師

郭茂

火能消え飛音あけり夏新虫

晩居

大根あまうし山近きやと尾系

蘭夫

高くと小村月之孫新さくり高南

高岡

汪由

枝の音えらあそといふ家さうり

雄上

稲刈りあ芽子露のまき哉

氷見

馬十

日之影あしの鈴凍り夏も心はと

石動

五芝

か入流い人新背戸なり山さうり

加州金沢

希岡

鷗鏡もあそい流りあ新橋

後川

暑き日や砂子釣瓶新さうり音

巨井

身格やかさくさ 涼 袖に雪 女 珈涼

霜の胡鳥のそびり 梨柿の露 化物

我々命にほよばれまゝ 和田のり 吳夕

何えりや問人多し 春乃月 麥水

吹之れ那や 秋風流らるる なき 木父

小魚女より たる木 振舞ふ雪見哉 見風

白菊の何とも なまぬすく 秋の葉 千代尼

暑りや 蛙一声 草志 底 小松 羅山風

葉極や 園寺 色は夕 石く 秋 松井

寒く 梅の 鱧荷 附はれ 氣は引 佛仙

白菊の 影く ほろまを ちき 梨 官腰 渭水

霜の 舞の 命の いんきり 桂風

小豆 吹音 鈴の 梅の 玉 牧子

待宵の 玉より 明戸や 秋すき 芦夕

人長く 唯 阿き ぼり き 屏の 雨 能州所口 百尔

山あやけの秋は菊の咲とあり  
哉前三國 女 哥仙

あまのつゆも物喰ふ人や雲の峰  
府中 之九

よもぎの峰の石這ふ小春の  
蕪江 松因

鐘つきの秋は多とまゝ木下閣  
敦賀 益江

初戸や難波も伊勢もお多し時  
琴路

正しくも小魚浮立まゝ田の角  
丸岡 梨一

腹立秋人にかまゝの柿の那  
女 奇峰

雪は心重なる秋乃 赤瓦う那  
江川八幡 雲羅坊

いづ川居も鳴る蛙や秋の秋  
栗津 可風

夕日さけ長や秋意や唐かじり  
京都 蝶夢

流来る初代木の中り秋の秋  
鈴五

分入事ハ人考も阿比鹿の声  
難波 寸馬

藻の石も新舟の秋の秋  
印国

一氣比乃宮うま

讚州丸亀

持運ふ砂をきよめ家忘る秋は 昆峯

掃きぬる人待るる秋寒く角 桃也

肥前長崎

夏菊中秋はふとく 咲好も 桐溪

鳴蛙るる人声もふとく 利水

所同人業肩の中は山さく 斗醉

一葉さけんそく 桐乃一葉式 枕山

勢州

亡麥林

夕涼ゆふ顔初る川 又竹と梨

秋と夜早秋ちまりのつり式 坡仄

つと一衣は皺や 免芸

横咲日さくゆふ 櫻良

尾州名古屋

臘月味噌煮所は白く 也有

夕露やむの 鳥峯

下馬さるや 割是 曉臺

甲州府甲

暑日や軒端より光る麦粒売 久住

正月や烏帽子あきなす旅人 藤田 葛履

いづくそ木槿の風の吹ふきり 市川 芦角

身に志すそ夜折夜となりふり 黒沢 空波

はたやとらくくくもを能く 成島 烏雪

奥州福島

秋の夜や蜂の古巢に風を音 吞銘

安達

秋の水古五器に流すきり 眞々

文通

橋州加古川

郭公鳴や矢をほく雨乃中 山里

駿河府中

多き声はもなき子も介 萬古

仙臺府中

獅子舞は久くもぬけも 祇川

武江

風流は誰か名付し 鯛 寛石

藝州

茶もやむ海へも入る 長谷 風律

暑きりや土をくくく 鳥



行脚之部

賣家子四五編菊新咲りきり

春中郁 柵の馬場の人通

名月や空かこ 柳りお鹿の声

何時り雪を巻るに降りきり

片岳や梅らり 名りきり新妻

こふき事も唯忙然と脈月

初老や目くらぬ 尼の心と帯

甚化

北鳥

三日房

芋月

大阿

桃如房

九蝶

海濱一魚ハまむとと荒布衣

雪や雪留能葉采る新荷のこ

雪らりや流氷と氷は柳りけり

石投りあけ音きり 曇り那

山物志くあたりきり柳

あ州やたのそくまてハ風もあり

夏雪や富士より晴る三保崎

僧 郷夕

一音

蘭二

赤城

宣中

乙菊

似鳩

雑

泥水能なり種々来々や梅の花

保岩

露重

風が吹くよき月夜よふ

爰之

何を当り空へ仰そ舞ひて

笛船

世話の何よりさへ淋し秋の言

女

知春

乃そふ里にけり椿桃柳

花屯

山多羽音淋し夜寝るよふ

旭鳥

吹込て井筒能暗く柳の影

二橋

胡蝶や多秋けりもさるきり

也菊

猫の戀あつて寝定る妻もあ

蝶羽

山里能何やゆりてかす

女

哥林

波の上ふ影あるそや細代也

吟糸

鶉といふ能物きき能嵐に那

奇袋

土筆我も習能ささき

少年

打壺

地を履きまへんはるをれふ

暮紅

敬まき物ちるもちる様

文化

四季

南栢亭

素山

我庭より 蔭るる青雨を穿ねて  
春妻やきく何るも親しみ  
夕風ふかき志のそと 素山より  
兼て花や焚火と抱く、狐の火

羅門

芭蕉乃めしむる 吟や馬捨場  
飲乃めめみ 箴やあつて郭公

垢付る 忌物冷くきわく  
闇ハ赤く一夜二夜そ 細代也

木人

花咲く妻飯むきぬ 田舎の形  
やうかふくく 紫夏に麻の角  
胡形や今朝ハ一輪上をく  
乞食の寝衣のうら

これふ

蝶阿

陽春の中子眠るや禪る  
昼は中し強し芥子の毒  
老僧の袂にほくろ零餘子  
待宵や火桶にもゆゑ

髪落 若落

跋

此小集者秀逸とありてはも何ん  
亦達識益者と摺て編る事少もあはれ  
唯菊坊の露と消ゆく悲しさを  
ふり終へ風流の美を饒りに求ふ  
其名の縁を引て菊名露と題号し  
隣里郷黨遠國の好士と尋菊法師

伊の可<sup>い</sup>有<sup>あ</sup>を<sup>を</sup>捲<sup>く</sup>く<sup>く</sup>四<sup>し</sup>時<sup>じ</sup>の<sup>の</sup>句<sup>く</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>幽<sup>ゆう</sup>壑<sup>こく</sup>  
深山の奥にわたりてまをい<sup>い</sup>は<sup>は</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>あり  
阿<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>終<sup>つひ</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>ち</sup>捨<sup>す</sup>置<sup>お</sup>け<sup>け</sup>あ<sup>あ</sup>も<sup>も</sup>く<sup>く</sup>中<sup>ちゆう</sup>程<sup>じやう</sup>に  
芭蕉翁の<sup>の</sup>十<sup>じゅう</sup>韻<sup>いん</sup>一<sup>いつ</sup>巻<sup>まき</sup>を<sup>を</sup>揚<sup>あ</sup>げ<sup>げ</sup>菊<sup>きく</sup>の<sup>の</sup>露<sup>つゆ</sup>の<sup>の</sup>  
光<sup>ひかり</sup>を<sup>を</sup>添<sup>そ</sup>ふる<sup>る</sup>事<sup>こと</sup>心<sup>こころ</sup>ふ<sup>ふ</sup>き<sup>き</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>後<sup>のち</sup>世<sup>よ</sup>に  
ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>は<sup>は</sup>さ<sup>さ</sup>り<sup>り</sup>志<sup>し</sup>を<sup>を</sup>人<sup>ひと</sup>に<sup>に</sup>疎<sup>そ</sup>か<sup>か</sup>な<sup>な</sup>る<sup>る</sup>事<sup>こと</sup>終<sup>つひ</sup>り<sup>り</sup>也<sup>なり</sup>  
亦<sup>また</sup>歌<sup>うた</sup>仙<sup>せん</sup>の<sup>の</sup>一<sup>いつ</sup>巻<sup>まき</sup>の<sup>の</sup>三<sup>さん</sup>七<sup>しち</sup>日<sup>にち</sup>の<sup>の</sup>管<sup>くわん</sup>の<sup>の</sup>吟<sup>ぎん</sup>を<sup>を</sup>予<sup>よ</sup>に

て<sup>て</sup>師<sup>し</sup>せ<sup>せ</sup>ど<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>各<sup>おのづか</sup>各<sup>おのづか</sup>勸<sup>すす</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>其<sup>その</sup>席<sup>せき</sup>に<sup>に</sup>連<sup>つ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>海<sup>うみ</sup>の<sup>の</sup>  
筆<sup>ふで</sup>に<sup>に</sup>酒<sup>さけ</sup>を<sup>を</sup>碑<sup>いし</sup>前<sup>まへ</sup>に<sup>に</sup>向<sup>む</sup>け<sup>け</sup>て<sup>て</sup>是<sup>こゝ</sup>を<sup>を</sup>故<sup>ふる</sup>の<sup>の</sup>翁<sup>おきな</sup>の<sup>の</sup>軸<sup>じく</sup>に<sup>に</sup>  
並<sup>なら</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>事<sup>こと</sup>れ<sup>れ</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>處<sup>ところ</sup>に<sup>に</sup>終<sup>つひ</sup>る<sup>る</sup>事<sup>こと</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>も<sup>も</sup>  
あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>見<sup>み</sup>る<sup>る</sup>人<sup>ひと</sup>聴<sup>き</sup>く<sup>く</sup>人<sup>ひと</sup>郵<sup>ゆう</sup>舎<sup>しゃ</sup>瑕<sup>けあ</sup>滴<sup>てき</sup>を<sup>を</sup>巻<sup>ま</sup>  
あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>終<sup>つひ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>終<sup>つひ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>空<sup>くう</sup>賢<sup>けん</sup>

一露菴  
蝶阿漫書

書林

江戸堂町三丁目  
須原屋市兵衛

昭和十四年八月二十日  
原本 杉字文庫

寫校合了  
後定記

